

アジア市場経済学会 第30回（2026年）全国研究大会 統一論題及び趣意書 「アジアと学び、世界を迎える：日本の企業と町の「成熟」の活かし方」

日本は成熟した先進国であるという認識が、国内外で一般的になって久しい。少なくとも40年は経過している。しかし、本学会が創立された1990年代半ば以降、いわゆる「少子高齢化」が進むにしたがって、その「成熟」は、無意識的に「老化」というマイナスイメージで捉えられることが国内で定着してきているといえないだろうか。今回の統一論題の趣旨は、そうした日本のイメージに疑問を投げかけ、アジアとともに学びながら日本の成熟をプラスの方向に活かし、世界から人々を迎えることで、たとえ老化を伴うものであったとしても日本の成熟をより豊かなものとしていけるヒントを探ろうとすることにある。そうすることが、将来においてアジアと日本に豊かな産業と市場、前途有為な人材が育っていく展望をつかむ契機となれば、この統一論題の下での議論は意義をもつことになる。

以下では、「アジアと学ぶ」こと、「世界を迎える」ことそれぞれについて、今回の論題について議論する際、どのような論点を想定できるかについてみることにする。

【アジアと学ぶ】

これまで、製造業（ものづくり）の発展において群を抜く日本がアジア諸国に技術を移転させることにより「日本がアジアに教える」、あるいは「アジアが日本から学ぶ」ことが両者の産業経済上の知的資源の自然な流れとみられていた。しかし、現在では、アジアと日本との関係はこうした一方向的な「学ぶ」「教える」という関係だけで成り立つものではなくなってきた。日本企業とアジアの顧客や取引先企業、内外の行政など利害関係者間の「価値共創」とは少し異なる領域・枠組みでの「アジアとの学び」について考える。例えば、日本企業によるアジアの大学・研究機関との産学連携に基づく相方向的な製品・市場・事業機会の開発、アジアの創発型先端企業との協同・競合・対抗を起点とした日本企業・研究機関間の新たな協調などである。これらの相互交流のなかで、日本の企業と社会の「成熟度の高さ」がどのように活かされうるか、様々な事例について議論する。

【世界を迎える】

2012年以降、円高が昂進・定着してくるなかで、海外観光客、特にアジアからの観光客が激増し、いわゆるインバウンド景気が日本各地の経済を底堅く支えてきた。そうしたなかで、シンガポールやベトナムを対象としたある調査によると、訪日を機に日本の伝統工芸品の魅力を知り帰国後もそれを取り寄せるなどして需要を持続させている観光客も少なくないという。国内では人口減少とともにシュリンクする工芸品市場をアジアの市場が補うことで、日本の伝統産業の新たな振興につながるケースであるといえる。ただ、オーバーツーリズムが地元住民の生活を一部阻害するなどの現象もみられるため、海外観光客の増大は決して歓迎すべきことばかりではないが、今回の大会が開催される京都では、京都市内に溢れかえる観光客を、市外の歴史的な景観と伝統的な農的自然に恵まれた「もうひとつの京都」へと案内する観光政策が行われている。以上のような例も、「成熟した日本」であればこそ可能となるものである。

以上に例示したものを含め、統一論題に関連した様々なテーマでの報告を促し、アジア、そして世界と「成熟した日本」との関係のあり方、「日本の成熟」の活かし方を問い直す。

以上